

# 服をめぐる

衣服の研究現場より—京都服飾文化研究財団(KCJ)広報誌



短編小説

「ニュー・クリノリン・ジェネレーション」

藤野可織

# 服をめぐる 01

一人一品

藤野可織（小説家）

『ニュー・クリノリン・ジエネレーション』

p3

今日の補修室

後世にのこす

p7

地産街道をゆく①

伊勢・白子

p8

KCI Wunderkammer

帽子飾り

p11

PEOPLE

あなたの「制服の思い出」は何ですか？

p12

一人一品

## 小説家 ×

### KCI 収蔵品

ゲスト

藤野可織

Kaori Fujino



小説家。2006年「いやしい島」で第103回文學界新人賞、2013年「爪と目」で第149回芥川龍之介賞、2014年「おはなして子ちゃん」で第2回アラウ文芸大賞受賞。他の著書に『パトロネ』『ファイナルガール』『ぼくは』（絵・高島純）など。

収蔵品

### クリノリン

crinoline



藤野さんが短編小説の題材に選んだ収蔵品は1865年頃のクリノリン。19世紀半ばの西洋で、スカートの膨らみを保つために考案された下着。もとは馬の尾毛（crin）を織り込んだ使い麻布（lin）製のベチコートを目指す。本品のような軽くて脱着着が容易なクリノリンの出現により、1860年代にスカートは急速に巨大化した。

● クリノリン 1865年頃 京都服飾文化研究財団所蔵 高山崇嗣製

#### 本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団（KCI）が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

#### 京都服飾文化研究財団（KCI）とは

京都服飾文化研究財団（The Kyoto Costume Institute, 略称KCI）は、西洋の服飾やそれにかかわる文獻資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文獻資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会（モードのジャポニスム）展、「身体（FUTURE BEAUTY：日本ファッションの30年）展」や、研究誌（「DRESSSTUDY」、"Fashion Talks..."）の発行を通じて公開しています。

Website <http://www.kci.or.jp/>

KCI  
The  
Kyoto  
Costume  
Institute

【短編小説】

## ニユー・クリノリン・ジェネレーション



藤野可織

私たちの脚のあいだにあるものを、彼らがあまりにも見たがらなかったために、私たちは進化せざるをえなかった。それがクリノリンだ。

クリノリンがもともと人工物だったことは、今では意外と知られていない。それは、はるか昔、19世紀中頃に考案された下着の一種だった。くじらのひげや針金をフープ状に加工したものをつなぎあわせて、鳥かごのような、牢獄のような美しい下着。

そっけない棒のようだった前史の野蛮な人類的姿を、私たちはほとんど思い出すことはない。

そのころの女たちは、その人工の牢獄に脚を隠していた。脚は、脚のあいだにあるものを想起させるからだ。男たちがそれを見たらがなくなかったというのは正確ではないかもしれない。男たちはほんとうはともそれを見たがっていた。それどころか、自分たちの所有物だとすら思っていた。ただ、男たちはいそがしくて四六時中それにかまっているわけにはいかないから、女たちは彼らからの預かり物をたいせつに、ふんわりとしたきらびやかな布で覆って保管する責務を負ったのだ。

だから、進化は女からはじまった。クリノリンを腰に取り付け、裾らす女たちの目の奥底で、遣伝子がしっかりとそのかたちを刻み込み、そしてあるとき腰に新たな器官を持つ女の赤ん坊が次々と、爆発的に生まれ

た。

それまで誰も見たことのなかった新しい骨、新しい筋肉、新しい血管、新しい皮膚。しかし、あまりにも見慣れたその形状。赤ん坊は、自分の意志でその器官を蛇腹に折りたたんでみたり、つまさきまで傘のように広げてみせた。小さな肉のクリノリンを備えた、私たちニユー・クリノリン・ジェネレーションの始祖だ。下着としてのクリノリンは、しばしば死を招いたといふ。すそを引つけて転倒したり、ふくらみの程度を把握しきれず暖炉に近づきすぎて火に巻かれたりと、愚かな事故があとを絶たなかったようだ。

肉体としてのクリノリンは、はるかに有能で快適である。フープを束ねて格子状に組みあげられた骨は、たしかにくじらのひげや針金と同じくらい細いがじょうぶでしなやかにたわみ、それにかむ筋肉はやはりかく強靱で、すべてをさぐるむ皮膚は薄く弾力に富んでいる。すみずみにまで行き渡った神経によって、脳の望むまじくこまやかにさざめき動かすことができるので、もはやクリノリンが邪魔になることはなくなった。腕や手や指が邪魔ではないように。

邪魔どころか！人工物だったころのクリノリンが、本人の意志にかかわらず他人の手でかんだんにたくしあげられたり腰から取り外されたりするものだったというのは、私たちににとっては非常な驚きだ。

今日、私たちのこのクリノリンは、他人の手がむりやりに折りたたんだり広げたりするのが困難なほどに頑健である。私たちはクリノリンを豊かに波打たせることによって感情をあらわすようになり、ほんとうに心から望むのでなければ折られたんで脚を、さらには脚のあいだにあるものをあらわすこともなくなつた。つまりクリノリンによって、私たちは自分たちの脚のあいだにあるものを取り戻したのだ。

女たちはしばらくのあいだ、男たちの戸惑いをクリノリンを震わせ、笑いあつたことだろう。たくましい男が力にまかせてドレスをひきちぎり、続いてクリノリンをひきちぎろうとしたときには、激しくそれをくねらせてその無法者を撥ね飛ばしたことだろう。そして、男たちが肉のクリノリンそのものに官能を感じ、彼

# 今日の補修室

TODAY'S  
RESTORATION  
ROOM

KCI 収蔵品の補修、  
保存を行う「補修室」より  
日々の奮闘を語ります。

第一回

「後世にのこす」



生地が弱り、あちこちに裂けが見られる 20 世紀初頭のデイ・ドレス。トレーン（引き裾）の部分が擦り切れた 18 世紀のローブ・ア・ラ・フランセーズ（宮廷服）。縫いとめていた糸が切れかかり、シーティングが今も落ちそうな 19 世紀末のイブニング・ドレス。

KCI の収蔵品の中には、このままではどんどん劣化が進み、何らかの手を加えないと後世に伝えることが難しい、さまざまな問題を抱えたものが存在します。

その問題に日々向き合っているのが KCI の「補修室」と呼ばれる部門です。これ以上の劣化が進まないよう傷んだ部分に補強を施したり、取れかかった部分を元の位置に戻したり、また、収蔵品に負担がかからない収納方法を考えたり、6 名の補修スタッフが収蔵品を後世に残すべく方策を立てています。

補修すること。保存すること。後世に残すこと。

西洋の衣裳を収集・保存・研究する KCI にとって、これらは頭を悩ませる事でもあり、同時に衣裳と対話するきっかけとなる事でもあります。衣裳の状態をよく観察して、それに見合った補修方法を吟味し、保存方法を選択する。KCI の補修室では、今日も収蔵品の声に耳を傾けています。（福岡）

らの指よりも細いフープをそっと引き寄せ、ひざまづいてくちづけたときには、喜びのあまりゆつくりと筋肉を収縮させてクリノリンを折りたんだことだろう。

そうするうちに、今度は私たちのほうが、彼らの脚のあいだにあるものをしきりに気にするようになった。それは私たちのものなのだから、そうそう気安くいじってもっては困ると私たちは言った。私たはいいそがしいのだから、物欲しげに四六時中見せてくれるのはやめてほしいと私たちは言った。その脚。脚のあいだにあるものを想起させるその脚を隠しなさいと私たちは言った。

私たちは彼らに、私たちのお下がりの、くじらのひげや針釜でできたクリノリンを投げつけて嘲笑した。あなたち、私たちがからの預かり物をついに保管したらどう？

弱々しい抵抗のあと、男たちはクリノリンを拾い上げた。ドレスを身につけた男たちのまぶしさに、私たちは目を見張る思いだった。同時に、私たちは思い知った。脚のかたちを見えなくしたところで、欲望が消えてなくなるとはいいことではないということ。また奇妙なことに、私たちは隠せと命じるところで、欲望が消えたあとも嚴重に隠されると、まるで彼らもつたいぶつてそうしているように見えてきたのだ。

混乱した私たちは、さらに嘲笑した。見て、あのぶざまなドレスさばきを。転んで、燃えて、なんてかわいそう。私たちの助けがなければまともに暮らしていけないのに、なにを気取っているんだか。

それで、彼らのほうも進化せざるをえなくなった。あるとき腰に、見覚えのある新たな美しい器官を備えた男の赤ん坊が生まれた。赤ん坊は、かわいらしい肉のクリノリンをばたばたさせて笑った。その瞬間、私たちは、私たちの進化がやっと完了したことを知ったのだ。

一人一品 ニュークリノリン・ジェネレーション

# 伊勢・白子



右：マリアン・フェルチュニ  
室内着 1910年代  
京都服飾文化研究財団所蔵  
リチャード・ホートン撮影



左：イギリス人のA・W・  
チューアアが編集した図  
案集に、雪輪に英文の  
染色用型紙が掲載され  
ている。「美しくも奇妙な  
デザインの本」1892年  
京都服飾文化研究財団  
所蔵



上：型彫師、内田氏による型紙と染められた生地

雪輪に葵。スペイン生まれのデザイナー、マリアン・フオ  
ルチュニイ (Marian Fortuny) はこの日本の文様に魅せられ、着  
物風の室内着をその文様で飾った。いまから約百年前、葵  
文は徳川の家紋として一部の西洋人に知られていたものの、  
抽象とも具象ともつかないこの組み合わせは人々の眼に新  
鮮に映ったに違いない。

それにしてもこの日本の文様、当時の西洋人が作ったに  
してはデイトールといい、バランスといい、なかなかよく出  
来ている。鈎爪のようにくるっとカーブした雪輪のアウト  
ラインなどは絶妙だ。実はこの文様は着物の型染に用いる  
型紙を部分的に切り取って使用したと考えられている。東  
洋の文様を好んだフォルチュニイは、おそろし型紙そのも  
のや型紙集を写すなどして本品を作ったのだろう。西洋で  
はおりしもジャポニスムとよばれる日本趣味のブームが続  
き、家具や食器、テキスタイルの文様として、日本の型紙  
のモチーフが芸術家たちのデザイン・プロセスに幅広く応用  
されていった。型紙は着物染める道具の域を超え、19世紀  
後期から20世紀初頭にかけて大量に海を渡っていたのだっ  
た。

型紙の産地が三重県鈴鹿市の白子という静かな港町にあ  
る。現在に名を残す「伊勢型紙」はかつて「白子型紙」と

呼ばれ、最盛期には国内に流通する型紙の約9割を占める  
ほどの一大生産拠点だったという。

四月の終わり、旧伊勢街道沿いの「伊勢型紙資料館」を  
訪れた。ここは代々型紙販売を取り仕切ってきた豪商・寺  
尾家の屋敷で、今も江戸の風情をとどめている。伊勢型紙  
技術保存会会長、六谷泰英さんが迎えてくれた。「神洗で貼  
り合わせた美濃紙に専用の彫刻刀で細密な文様を彫り出し  
ていくのが伊勢型紙の特徴です」。およそ幅60cm、天地30cm  
の地紙のなかに、極細の線や点で表現された植物柄や縞柄、  
幾何学柄が寸分のくるいもなく整然と並ぶ。なかには目を  
凝らさないと見えないほどの無数の点でびっしりと埋め尽  
くされたものもある。まさに手わざの極みだ。「白子での  
起こりは鎌倉時代とも室町時代といわれていますが、実際  
はよく分かっています。江戸のはじめにここが紀州藩領  
となり行商の特権を与えられたことで、質、量ともに飛躍  
的に発展しました。最盛期を迎えたのは江戸時代後期でし  
た」。江戸時代、関西屈指の貿易港だった白子。そこに目  
を付けた紀州藩と、商機を逃さなかった同地の型紙販売商  
が手を組み、型紙の独占販売体制が築かれる。型紙は海路、  
陸路を駆逐して日本各地の染め師のもとへ送られ、そこで  
精緻な柄を完璧に染める技が磨かれた。こうして日本の型  
染の技術は世界でも類を見ないほど高度に洗練されていった。



伊勢型紙には「道具彫り」「鏝彫り」「鑿彫り」「突彫り」という四種類の技法がある。型彫師はそれぞれの技法ごとに徒弟関係で結ばれ、一つの技法を極めていくという。この地区では現在、型彫師約25名がその技を受け継いでいる。「突彫り」の型彫師、内田勲さんの工房を訪ねた。サクッとサクッとという軽快な音を立て、鋭利な刃が紙を削いでいく。細かく複雑な植物柄だが、この道50年の手は一瞬の迷いもない。「よく失敗しないんですか、って聞かれるんですけど、体が覚えているんでね。根気のいる仕事ですけど、面白いし、楽しいですよ。」そう言いながら、みるみるうちに細い葉の葉脈が姿を表す。瑞々しい若葉が繁茂していくよう



に。

四種のみかで最も古い技法といわれる突彫りは、文様を地紙に写し取り、その下に地紙を6ミリ7枚程度重ね、穴が開いた板にのせて垂直に突くように彫っていく。刃先を細く尖らせた専用の彫刻刀は線や折線の彫り出しに適しているため、植物柄などの有機的な文様の彫りを得意とするそうだ。三重県立美術館学芸員の生田ゆきさんによると西洋に伝わった型紙の多くが突彫りだという。日本の植物表現にデザインの源泉を求めた芸術様式が西洋各地で興った当時、突彫りの型紙はあまたの芸術家を刺激し、創作へと繋がり立てたことだろう。

フォルテチユニイが用いた文様のオリジナルも突彫りの型紙と思われる。むろん彼にはその認識はなかっただろう。しかし、手わざから生まれる有機的な美しさと文様という様式美が混然一体となった洗練の極みを、デザイナーの本能が嗅ぎ取ったことは想像に難くない。はるか遠く離れた日本と西洋の、デザインの交流がここにもあった。

（取材文・岡井直子 写真・福嶋英敏）

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫

そこはまさに「驚異の部屋」。



## KCI Wunderkammer

### 帽子飾り

素材：鳥の羽製  
製作年：1870年代～1930年代  
原産国：不詳

美しい鳥の羽根で自分を飾ってみたい。太古から続く装飾への欲望のひとつである。19世紀後半～20世紀前半の西洋では、女性たちがその欲望にとまづかた。色鮮やかな極楽鳥や七色に輝く孔雀の羽根、ふんわりとボリュームのある鷓鴣の尾……。当時、お洒落の必須アイテムだった帽子の装飾としてふんだんに付けられた。羽根だけでは物足りず、一羽まるごと帽子に飾ることも。

# People → あなたの「制服の思い出」は何ですか？

## 杉浦幸子 *Sachiko Sugiura*

武蔵野美術大学芸術文化学科教授



制服を思い出す時、それは初心に戻る時である。私の制服は、最初に勤めた会社の秘書室で支給された、白ブラウスに紺色スカート&ベストの三点セットだ。会社に着き、制服に着替え、素敵な秘書ができあがり、となればよかったが、ベストのボタンをかけながら朝礼に駆け込む私には、制服と制服を着る世界が身に付かなかった。当時の写真に写るとどこかつらな顔の私は、もう一度生きようと、三年後会社を辞めた。それからも制服を着ることはない。でも、あの制服を着たから今の私がいる。

## 小北光浩 *Mitsubiro Kokita*

デザイナー／神戸芸術工科大学助教



社会人になってからは、制服のようなかたい服を着るでもなく、スーツが仕事着ってわけでもないで、制服の思い出なんてそうではなく、べたに学生時代の話でなんとかと思いましたが、そういえば、一度、デザインリサーチで実際にイートン校まで制服を見に行ったはいけど、学内にずかずかと入れるわけでもなく、結局、寝坊して遅い登校をしている子をちらっと見たのと、学校の近くの制服屋さんめぐりでお茶を濁したのも、今となってはいい思い出です。

## 坂田佐武郎 *Saburo Sakata*

グラフィックデザイナー



制服の思い出といえば、高校1年の夏。シャツの裾を出しているのをテニス部の先輩に見つかり、風紀を乱すという理由で猛トレーニングの処罰を受けたことがある。その処罰をきっかけに部活を辞めた軟弱な私は、同級生との音楽活動に傾倒した。非常にわかりやすい15歳だった。そして美術の岡松先生にそそのかされて応募した絵画コンペで入賞して美術部員となり、気付けばデザイナーになっていた。制服は、規則があるがゆえにドラマを生む素敵な衣服だった。

## 服をめぐる

### 編集後記

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第1号

2015年7月13日発行（年3回発行）

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）  
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所内南町103  
電話：075-321-9221  
ウェブサイト：<http://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城（京都服飾文化研究財団）  
デザイン：坂田佐武郎  
写真：成田舞、福嶋英城

昨年の夏、知人から藤野可織さんの紹介を受けた際、驚きの事実を知らされました。「わたし、学生のころKCIで博物館実習を受講したんです」。毎年約20名、累計700名以上を受け入れてきた学生のなかに、未来の芥川賞作家がいたなんて。そんなご縁で、巻頭の短編小説が生まれました。服は第二の皮膚とも言われますが、本作はまさに皮膚となったクリノリンが登場します。このように「服をめぐる」では、モノとしての服だけでなく、イメージや言説など幅広く服の面白さをお伝えしていきたいと考えています。次号は11月発行予定です。どうぞお楽しみに。創刊号を発行するにあたり、ご執筆や取材に快く対応して下さいました皆さまに心より御礼申し上げます。